（十五日夕刊）

磐城新聞

休刊　第一第三日曜大祭日

定價　一部二錢　一ケ月六十錢　郵税十五錢

廣告料　壹行六十錢指定廿錢增

發行兼編輯印刷人　蓮沼龍輔　福島縣平町田町十六番地

發行所　磐城新聞社　電話五六四番

雪夜爐稿□□□□

…飯郷手記…

福島將夫

飯郷してからも餘り健康性でない私は、登別溫泉から湯の川に轉じた。

間もなく同じN旅館に杉澤文月來宿して、酒好きの彼の相手こそ出來なかつたが、話談に、散歩に、入浴に、寫生に、日々を過してゐた。こ、日曜日の時雨の降りしきる中を、わざ〳〵千代ケ岱にゐる海老名禮太が訪ねて來た。——北海道と揚げる詩心——海老名、杉澤、米山、秋山、和田、外に太田、松本、黑杉、坂本、等々である。

彼等は一ケ月に一回位は必ず詩歌雜談會を催して相互意見發表を背として、中央詩壇へ突進しつゝある。北海道詩人聯盟の各地の文部は披講會を催して同人誌なるものを、清型に發育せしめ詩作に力を入れて、發盟相互の親脈的握手を交してゐる。

北海道で一番の隆盛をきたしてゐるものは、口語歌（新短歌）である何如なる小さな村でも、同人雜誌の刊してゐない處はない位であら。相當みとむべき新進詩歌人も拾ヶ下らない。口語歌人では、伊東音次郎、並木凡平、高松利雄、淡光任、外略す。中央歌壇でも相當みとめられた人たちである。歌祭の二三は刊してゐる人たちだ

平のデモ詩人、痴歌會を催したり、一年に三回ぐらゐか、屁ふきにもならない雜誌を刊す。自稱詩人逵とは雪と墨の差異がある。死難あとか詩南車とかいふ、よくは失念してゐるが同人の中に屑の知き歌を作る宮田とかといふ自稱歌人の存在は記憶に新しい。

私が今更喋々せずも、島田春夫君が平館の週報でケナしたはずである。

杉澤は肺患の爲に湯治に來てゐるのである。內地的な暖地である函館の近所が彼の衰軀を治するに適當と感じたらしい。

彼の爲した事も空虚に終り、彼は札幌大學病院の青白い病室で逝つて了つた。

色々な文藝雜誌が
はづんでた
鈴蘭カフーェの
更けた雪の夜

×

一つの外套を
二人して
着て歩んでた
凍つた路——
鈴蘭街道。

×

はつと吐く息の
白さに身をちぢめ
軒をみあげる
館氷柱の長きこと

×

拾年後の俺の姿を
見て呉れと
文月と別れた
札幌の夜の驛

情熱的な横顏を現、靜かに想ひ浮べる時、こんな歌が口づさまれる。

訪ねた海老名が、痩軀の杉澤を一瞥して一驚した樣子のうちに「杉澤！變つたなあ、大分いゝか？しつかりしろ」

「ウン、大丈夫さ、未だ若いんだからなあ、はゝゝゝ」杉澤のこけた頬に窪む片くぼが淋しい微笑をなつてゐる。

杉澤は北海日々新聞の記者で、相當道內でも幅を利かしてゐる。

私自ら紅茶を入れた時、杉澤は隅から藤椅子を樣々に出して來て痩せた軀を危ないやうに凭せ、何故か幾分血走つたPENSIVGな眼を時々遠景の秋枯れた山々の方に向けながら、左手に血を支へ、右手に茶碗を執つて、靜かにすゝり呑んだ

海老名は其の衰軀を右眼で凝つとながめ私に話し掛けた

「志村、氣分はいゝか、此の間立待岬にある啄木の墓へ詣けたそうだが、どうだつた第一印象は？」

「やゝ、墓も草でぼう〳〵としてゐた。奇麗に掃除して、無名の花を詰けて來た唯奴の惡戯やら墓碑の裏側に落書がしてあつた。何處の奴やら、ひどい事を爲たものだ」

啄木の詩歌を讃する私には輕い憤懣な氣が漲つて海老名に言つた。

彼は詩人らしき態度のうちに、額に垂れ下つた頭毛を左手で後へかき上げながら——

「志村、大方、地方自稱詩人逵の惡戯だらう、莫迦なことだ。なあ、志村、立待岬から大森へ廻り、湯川溫泉にひたつて來れば[illegible]の、素晴しい詩境く、

「直に自動車で飯 た、故鄕（北海道）の地に足を踏み入れると素的な詩でも出て來さうな感覺がある。福島あたりへゐつても、二年間は詩作などは、てんで駄目だ。總てが無爲な生活だつた」

「俺も師範學校時代から良く詩作した。そして同人誌（砂漠）や旭新聞に發表したものだつた。君の兄貴などと「水脈」などを刊した記憶がある

暦の栞

舊暦十二月十七日　新暦一月十六日

▲一白　投機心を去り堅實に勵む時は大吉日と成る▲二黑　不遇の日なれど手堅くすれば進路開き來る▲三碧　慣れぬ事に誘はれて失敗の臍を嚙む不安日▲四綠　空顏みせず自ら勵まし自ら稼ぐに若くなし▲五黃　守れば失なし勝たんとすれば却て負となる▲六白　氣を焦つときは極端の變化を生じて悔あり▲七赤　懸崖の絶頂に躍るが如き危險の伴ひ易き日▲八白　意見の逼らぬ日屆するは伸びるの基ひと知れ▲九紫　張合ひよく事業の進み行く日但飲食注意

講談

幕末奇傑 高山彦九郎 (42)

中西洋々作　布施長春畫

凋落の都（六）

夷川なる、廣瀨屋幸兵衛宅までの飯るさに、ひこ九郎はすつかり萎縮して了つた京の街の有さまをみました

衰亡の色は町を行く人の顏にも見ゐ、疲弊した街の面影は一軒〳〵の家毎の門にもうかゞはれます。その靜けさの中をまるで犬のやうに歩きまはつてゐる、江戸幕府特異の幕史だけが特異な存在としてひこ九郎の眉をひそめさせました。すべてのこの街の凋落は彼ら幕史の威壓に依つて來たされたものである如何にもひこ九郎には思はれました

「これは、た飯りなさいまし」

廣瀨屋の近くまで來たとき、いち早く彼を見とめた幸兵衛は、かう微笑みかけ乍ら近よりました

「あまりた歸りが遲いのでそこ迄お迎へに上らうかと思つてをりましたので」

「ほう、それは濟まなかつた喃」

ひこ九郎は今更のように幸兵衛の好意に感じいり乍ら云ひました

「もう幾刻頃ぢやな」

「さあ、もう、六つでもございませうか」

あたりはもうぼんやりと夕暮れて、はるか西の空のくれなゐなのが、明日もまた好天氣であることを思はせて居ります。

「如何でございました。御所の御樣子は」

「うむ」と、ひこ九郎は思はず聲を落して

「畏きことながら、あまりのお寂れように唯々涙がこぼれ申した

「左樣でございませうとも

幸兵衛も、同じ心に合槌うつて

「毎日のように拜ましていたゞいて居るわたくし共でさへ、つひ江戸の繁昌をみて來て居りますだけ、た寂れ方が目にあまつて……

「さうたらうとも、江戸城の豪華なにひきかへて、これはまた冠履轉倒の形だ。畏れ多いことの極みといはねばならぬ。」

ひこ九郎は今は多くを云ふことを好みませんでした彼の性質として萬感胸に迫り熱情の奔逸に思ひ迫つて言葉も口に出ないのでした

幸兵衛が家に入つて、足をすゝぐとすぐに風呂を通してくれました

「水は、憚りながら鴨の流れでございます。どうぞごゆつくり汗をお流し下さいまし」

かう云つて幸兵衛が自慢した程あつて、小氣味よく水は澄んで居りました。暫らくはすべての思索をすてゝひこ九郎は湯槽につかつてをりました

やがて、風呂を上ると座敷に招せられて山海の佳肴が並べられました

最後に、銚子をもつて入つて來た女房を

「これが、手前家内でございます」から幸兵衛は引き合せました

「たゝ、左樣か。それがしは高山ひこ九郎、思はぬ御厄介をたかけ申す」

「いゝゑ、さんだことでございます」女房おふぢは叮嚀に挨拶をかへしました

「何分、町家のことゝて充分なおかまひ出來ませぬがどうぞごゆるりとお過し下さいませ」

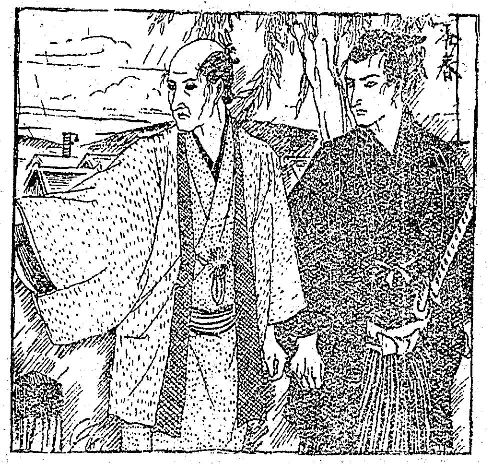
「いや、辱うござる」

ひこ九郎は幸兵衛の方に向きかへつて

「なにか、言葉の樣子では關東の方のようぢやが、御妻女は京の方ではないのかな」

「へゑ、やはり江戸の者なのでございます」

「おゝ、さようか」ひこ九郎は始めて合點いつたように、大きくうなづきました



廣告

平町南町　上田醫院　電話一二九番

夜間診療

胃腸　梅毒

內科　十二指腸虫病　專門　內科部

淋病　婦人病　皮膚病　專門　外科部

松村胃腸性病科醫院（平南町電話一〇七番）

毛糸編物講習

生活改善は衣服から
消費節約も衣服から
發育盛りの小供には
毛糸編物が第一
夜間輕便文化器の
編物を無料講習致して
居ます、どうぞ
御遠慮なく御出で下さい

平町田町　藤田女學校隣

ハシモトヤ糸店

外科　醫學博士　藤本順

產科　婦人科　院長　木村寅次郎

平町新川町　木村病院　電話一六四番

特賣!!

たひら正宗　福島縣清酒品評會一等賞受領

花春　同　優等賞受領

醤油醸造元　鹽屋　山崎合名會社　電話一〇番

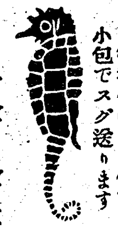
淋病と御婦人のせうかちには是非この藥が必要

殊に、慢性の淋病、せうかち、で此藥に氣付かぬと一生涯惱まなければなりません、とに角一週間飲めば眞價が判ります

注意、藥は三週間迄ありますが意外に早く治る方がある故、最初は先づ一週分で結果を見る事が必要です。

峰岸淋丹は一般賣藥と異なり家傳の秘法を嚴守して調製する當家の專賣藥なれば、希望者は本家へ來訪あれ遠方の方は前金なり代金引換なり御都合のよい便で申込み何品か判らぬ樣密封小包でスグ送ります

一週分二圓七十錢、二週分五圓、三週分七圓、代金前金は送料十二錢、代金引換は三十錢



東京峰岸淋丹　縣下一手頒布所　平町南町火の見下　電四三九番

內科診療

消化器病科　呼吸器病科
小兒內科　一般內科
入院應需（自炊ノ便アリ）

平町鼠坂　渡邊內科醫院　電話一六一番

◎獨乙フンケル會社製　蓄音器針新荷着

◎一本の針デ五回モ使用ガ出來ル
◎高音低音ノ調節自由
◎値安ハ舶來品中デ最モ安イ勿驚
（二百本入五十錢）
△この最モ經濟的ナルアノ入針ヲ御薦メ致シマス

特約店　大谷時針病院　電話十九番

營業種目

內地材　材木各種、羽柄材各種　建築諸材請負　礦山用坑木其他諸材請負

外材部　米松、米杉、大角製材調達　請負　其他

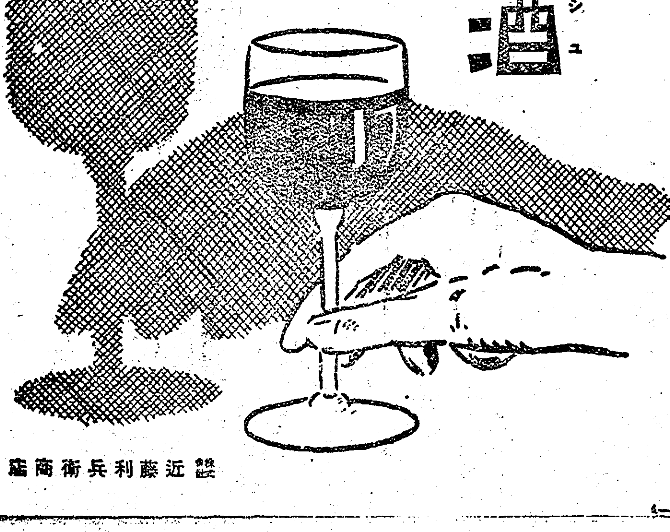
（百）佐藤材木店　常磐線平町新川町　電話三三五番

蜂ブドー酒

朝寒夜寒に……

お風邪の豫防に

お寒さの折の毎食前の一杯　殊に外出前やお就寢前の一杯は　血液の循環をよくしてお身體を温め　食慾を增し消化を助け　且つ絶大なる殺菌力は美事に感冒を驅退致します眞に凡百の豫防藥に優る効力があります



近藤利兵衛商店（東京 大阪）

4—102

兒童の職業紹介に 汗だくの紹介所
就職希望兒童の父兄に 注意書を發送

平職業紹介所では小學校の卒業期も近づきそろ〳〵實社會に向つて大なる希望を抱て飛び出す少年達に對して社會の暗黑面を見せつけない樣冴潤、平窪、神谷、飯野、内郷、四つ倉、湯本小名濱、植田、勿來等敍も實業方面に發展すべき兒童を抱含する小學校等聯らくして職業斡旋に力瘤を入れておる去る十日には求職希望の父兄と兒童へと題したビラを送付したが最近また父兄と兒童と題したパンプレットを配頒して父兄の兒童に對して如何なる道を選ぶかを指示してゐる就職兒童は勿論であるが中等學校方面に進む兒童も極めて冷靜なる頭を持て自個の取るべき道を判斷すべきである現に本縣では實業學校方面の入學者は漸次増加する傾向があるが中學校方面に至つては中途退學者が非常に多いさうである(白河中學の如きは特に多いさうである)今三月下旬に施行さるゝ中等學校入學試驗志願學者は定めし緊縮不景氣に影響されるであらうと

昨年中の遺失物 平署だけで五千圓
拾得屆は僅に四分の一 不景氣世相の一面

平署は種々な事件が多いので全縣下に知られてゐるが事件とは何等關係のない遺失物を見ても他署を
壓倒 してゐる、昨年中に於て同署で取扱つた遺失物の成績を見ると、遺失の屆出をなした者が四百二十件で、之を通貨に見積もると四千五百三十二圓になり一方拾得した件數は六百八十九件であるが金額にすれば一千二百七十九圓八十三錢にしか當つてゐないこの遺失と拾得とを合せると累計五千七百餘圓になるのであるが、遺失者に還付したものは五百八十五圓八十八錢五厘、拾得者に還付したものが一千百六圓九十錢五厘國庫に歸屬したもの百十五圓八十錢 合計約二千圓にしかならず、遺失金額四千五百圓の半額にも當つてゐない、遺失したものより發見したものが少いのは
當然 と言ひやうが遺失した四千五百圓餘の中發見したのはわずか一千二百圓餘であるから三千三百圓餘は闇から闇に葬られた譯である。

町有地を 無斷借用
不心得な 有力家三名

石城郡四倉町有志長谷川某外二名は同町の許可なしに同町々有地である海岸砂漠地た昨年十月頃から工作場を建造して使用してゐるので町當局では右工作場の撤去をせまつたが言を左右にして應じないので十三日前記三名を正式に役場に出頭させ撤去方を嚴達したが無斷借用をしてゐる者は四倉町に於ても相當有力者なので問題になるものと見られてゐる

恐ろしい火災の 豫防と注意
若し出火したら斯せよと 井上平組頭談

火災シーズンに入つてからの平地方にはポツ〳〵小火が頻出してゐるので平警察署當局では管内町村と共力して此の豫防に努めてゐる一方各消防組でも例年の通り組員を督して盛んに防火夜警に努めてゐるが此れに就いて平消防組頭井上茂作氏は語る「十二、一、二月は古來から火事の季節とされてゐます

近火の は決して周章のあまり窓や雨戸などを開けてはいけません、たとへばすぐ隣の家が燒けても窓や雨戸がしつかりと締られてゐれば狐色にそれ等の戸がこげても中々引火しないものです、そのうちに消防がかけつけて盛んに燃ゑてゐる家に水をかけるのはかへつて火勢を散らすものですから、燃えてゐる家よりも先に隣の家に水をかけて消防に努めますから類燒を免れます、これに反して窓や雨戸をあけておくと座敷の中に火を吹き込み、唐紙障子などの燃ゑやすいものに飛火する危險が非常に多くなります、もし幸ひに類を燒免れたとしても前記のやうに

消防はまづ隣家に水をかけて止める方法を取るものですから、あいた窓などから水が飛こみますから座敷中ズブぬれになり水溜が出來たりして、燒けたも同樣の損害をかうむるものです(人の家に水をブツかけて)とよくガミ〳〵いはれる方がありますが、これは御本人の不注意でくれ〳〵も近火の時は窓や雨戸などはあけないやう、土藏などは隙間を泥とか味噌で塗りふさぐやうに願ひますまた荷物などを戸外にかつぎだすことも禁物です、消防の活動の邪魔になるし、ホースの漏水のために折角安全に出したつもりの荷物を臺なしにされます、市内で人家がこんでゐる所などは火事の

現場に接 近するには近所の家の疊の上をホースを通さねばならぬ場合があります、そんな時は狼狽して荷物を取散らして、水にぬらさぬやうに、ホースの道の疊はあげて片づけるほどの沈着さがほしいものです。

馬の話 □□□□
額と小繪馬の區別
面白い繪馬の由來

元來繪馬を神社や寺に奉納するといふ事は信心から出たものであつて、その氣持には二つの場合があつた一は願ひ事がかなふやうにと奉納するものであり、二は願ひ事が成就して

御禮 のしるしに奉納するものであつて、その繪馬も馬を賭つたとか鍋を頼つたとかその賭ち物を板に描いて奉納する人とさうした事には全然關係のないものを描いて奉納する人とある、この樣に繪馬を上げる目的などゝ、繪馬に描かれるものとの各々二つの場合がある、しかし私共の今日云ふ處の繪馬が神社佛閣に奉納される樣になつたのは後世の事で、その最初―繪馬の

起原 ともいふべき――時代は判然しないが右の業な目的のために、或は昔、戰ひが勝つやうにとか勝つたからといふ意味のもとに生きた馬を奉納したのが始まりである、それが漸次生きた馬から木馬になり次には紙に馬を描きさては板にゑがいて獻納するといふ風になつて來たもので古い時代の文献などによつてもいろ〳〵の事がうかゞはれる、本朝文粹の中の寛弘九年六月大江匡衡北野天神

供物 の文中に「色紙繪馬三匹、走馬十列」云々といふのがあるが、これによつて考察してみると、この以前までは木馬が納められてゐたのだが、此の頃から漸く立體から平面化して紙又は板に繪馬がゑがかれるやうになつたらしく思はれる、即ち繪馬として現れて來たのは鎌倉末期のころからゝしい、太平記などにも板に人形や馬をゑがいて寺に納めたといふやうな事が見ゑてゐるが、やはりこの時代である、處が

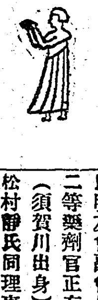
時代 の變遷につれて、漠然としてゐたものが漸次明確になつて來て、額と小ゑ馬の二つに區別されて來たのである、永享年間當時の畫家土佐行秀といふ人が三十六歌仙を額にゑがいて北野天神に奉納したものが今日に保存されてゐるが、これが當時神社佛閣に額を奉納する事の抑々の始まりとなつたらしく、以來盛んに各方面の畫家によつて額が神社や寺に上げられたものである、しかしそれは

繪馬 を上げる氣持とは多少異なつてゐて、心願があつてといふよりも當時の畫家は今日の樣に展覽會といふやうなものを催して、自作を世間に發表する機會がなかつた爲め、その方法をいろ〳〵に考へてゐたのである、處が土佐行秀が額として北野天神に奉納したといふ事がはしなくも世間の評判となつた爲め、始めてそこにヒントを得たわけで、以來自己の藝術を世間に廣めるため、且は自己の名を後世に殘すために額として各方面の寺や

神社 に奉納するやうになつたのである、西鶴織留(卷四)(元祿七年)に「總じてゑ馬は萬人の目にかゝれば、かりそめながら大事のものなり、都の淸水に長谷川長藏が筆にて五郎朝比奈が力くらべをかけり此袴のまちのひだ折たる上に心もなく舞鶴の紋から書たる所ゑ熊照の染物屋の下女が見出して洛中是が沙汰となり、長藏一生これをわづらひけるとなり」とある又同書に「天滿天神に山本文右衛門のゑがける大森彦七のゑ馬あり

彦七 の掛鳥帽子に緒を書き落したりと非難するものありしが、彦七の時代までは髮に忍びの緒をつけて留め、掛鳥帽子に緒をつけ始めしは百年以來といふ者もあり」とあるがこの樣に徳川時代に入つて額といふものが、ゑ馬として非常に認められて來た、しかしそれは信仰的見地から出たものではなくなつてしまつたので、この一方に小ゑ馬といふものが信仰的意味から盛んに人々に迎へられる樣になつていつた、殊に

元祿 年間になるとゑ馬をゑがくといふ事が職業化されて來て江戸八百八町は勿論、全國的にゑ馬をゑがく專門家が殖ゑていつた



野崎縣會議員 突如昨日召喚さる
約二時間半に亘つて 武田檢事の取調を受く
事件意外に進展か

縣會議員平町野崎滿藏氏は突如昨十四日午前十時半平檢事局に召喚され武田檢事の手に依つて約二時間半に亘り嚴重な取調を受けたが事件の内容は一切嚴秘に附されてゐるが仄聞する處に依ると去る大正十三、四年頭に行はれた〇〇〇〇〇〇の〇の權事件にからまるもので途に司直の活動を見るに至り有力な參考として氏の召喚に依り石城民政部會の〇〇〇〇〇氏外同黨の有力者等續々召喚を見るものと豫想され事件の進展は各方面から注目されてゐる

謎宮に入つた 連子殺し事件
犯人龜喜代の自白依然變らず 平署手古摺る

平驛待合室附近で去る八日午後七時頃擧動不審のかどで平署に連行取調べの結果生活に困り亡妻の連子武夫(五)を絞殺し隅田川上流に投棄したと意外な犯罪を自白した河沼郡群岡村字下野尻長谷川龜喜代(三〇)にかゝる怪殺人事件に關して平署ではその後連日關係各地に照會を發し事件の調査を進めて居れど全然手がゝり無いことは既報の通りであるが平署では事件の性質上放任出來ず尠からず焦慮し留置場から龜喜代を引出し更に嚴重なる取調をなしたが龜喜代は幾分低腦とは云へ連子殺しの事實を頑としてひるがへさないので平署ではほと〳〵困却し五里霧中になつてゐる

讀者と記者
娯樂費
中谷生

元來娯樂といふものは私共の生活になくてはならないものとされてゐます、生活が煩瑣であらうが閑散であらうが、又緊縮しなければならない世の中でも

娯樂 をなくしてしまふ事は私共には出來ない事です、しかし一口に娯樂と云つてもその人々の趣味によつて異なり、又非常に多方面にわたつて居りますそしてある人々は趣味と娯を區別して考へてゐる人もあり、又それを一緒に考へてゐる人もありますが、何れにしても大概の場合一つの娯樂を求めるには相當の時間と費用を必要とするものである事は云ふまでもない事であります、それ故

合理 的に考へれば生活の必要費として私共の日常生活に娯樂費といふものを豫め立てゝかかなければならない筈ですがさて皆さんの家庭に、又各個人個人に『毎月娯樂費は幾何かゝつて居りますか』と聞いたら、はつきり答へる事の出來る方は極めて少ないだらうと思ひます、最近某雜誌が相當知名の士にこの樣な質問を出してその答へを掲げてゐるのを見ましたが

正確 な答へをしてゐるものは皆無と云つてもよい位ですおそらくこれは世間一般の家庭もさうであらうと考へられます、尤も娯樂にもピンからキリまであつて、金のかゝらないで濟むものもあれば、莫大な金のかゝるものもありますそれはその人の嗜好や經濟狀態其他によつてちがつてゆきませうが、こゝで注意しなければならないのは、娯樂から浪費くせがつく事であります、娯樂と云へば云ふまでもなく自己を

亨樂 するものであるだけに、金さへ持つて居れば多くの人は大概の場合大きな氣分になつて浪費してしまひたがるものです、臺所經濟を一生懸命に切りつめても、もし一方に何ら豫算もなく時の氣分にまかせて娯樂に浪費してしまふならば、一方の節約は何ら意義をなさない事になつてしまひます、世間には家庭にける家族の生活を隨分と切り詰て娯樂方面に

派手 な消費を何ら惜氣なくしてゐる人々がありますが、決していゝ事とは申されません、尤も第三者が見てご樂とするものでも其本人の生活にとつてはそれが生活上必要な場合がありますかうした場合は別として、ご樂といふものを他の經濟に比例せしめて無駄な後に悔いを殘すような浪費などせぬ樣、豫め豫算を立てゝ無駄がなく生活を亨樂してゆく樣にしたいものであります、殊に

子供 の居る家庭では金錢によつて求め得るご樂をさけて精神的に何ものかをもたらす事の出來るものを求めてゆく樣にしたいものです、ご樂必ずしも金を要するものでない事を知らなくてはなりません

一人當り 二十二圓
平町民の負債額

平町に於いて調査した平町の負債額を見ると四十三萬二十八圓八十錢で縣下第四位にあるがこの額は例の水道擴張起債の二十萬は加算されてないので假りに起債が決定すれば實に六十三萬餘圓となりこれを町民に負擔させるとなると今年生れたばかりの赤ん坊まで二十二圓五十錢强の借金を負ふことになると

寒稽古が
昨日納會式

平警察署柔道寒稽古納會は去十三日午後三時から五時迄同署演武場に於て池澤氏審判の下に盛大に紅白試合五人拔と順を經て進み最終の美を飾る爲め平署の花形勇士池澤氏と樋口氏の模範試合あつて散會した

高久病院

明友藥劑師會の 支部發會式
昨日平町に於いて 盛會裡に創立

明友藥劑師會磐城支部の設立總會は十四日午後二時から平町谷口樓に於いて開縣内各地からの參加者三十餘名出席し東京本部から明治藥學專門學校長恩田重信氏明友會副會長高橋勘次氏二等藥劑官正有馬晋吉氏(須賀川出身)茨城支部長松村靜氏同理事細谷勝氏宮城支部長代理理事小野龍吉氏等の來賓あり創立委員長平町山野邊東次郎氏開會を宣し議案審議後役員選擧を行つた。

第一回役員は 支部長山野邊東次郎、副支部長大友秀一、幹事瀨尾啓之進外六名

同五時から懇親會に移り大盛會裡に午後八時散會した

動力使用
最新獨逸式製材機取付
製板製材並びに諸建築用材一式請負
増尾木工場
迅速―叮嚀―安價
平町仲町 増尾甚市郎
電話四六九番

舊年末謝恩興行
三大名畫
瀧花久子 まごころ
大河内傳次郎 沓掛時次郎
栗島すみ子 浮世小路
平館
舊年末中普通席金十錢

一圓十錢のフランス
マルソー會社元詰
生葡萄酒
マルソー、ブランク
マルソー、ルージ
優良にして安價賣行き飛ぶが如し
平二 西村屋藥舖
たはなし 三番

新築落成
耳、鼻、咽喉科 氣管食道科 (專門)
平町南町(寝診療所向電一七〇番)
大和田醫院
大和田郡司
自炊の便あり

內臟外科
外科一般
花柳病科
入院隨意 自炊の便あり
平町田町赤心堂病院跡
安齋外科醫院
電話四三六番